

I 2012年度認証評価における指摘事項（努力課題） ※参考

<p>(工学研究科)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生の受け入れ方針において、入学者選抜の内容や入学生の実態等が記述されており、求める学生像が具体性に欠けるので、明確に設定するよう改善が望まれる。⇒対応済 ・教育課程の編成・実施方針について、開設科目の説明や教育方法の実態について記述されており、方針として不十分であるので改善が望まれる。⇒対応済 ・大学院博士後期課程において、コースワークを適切に組み合わせたカリキュラムとはいえないので、課程制大学院の趣旨に照らして、同課程にふさわしい教育内容を提供することが望まれる。⇒対応済
--

II 2016年度大学評価委員会の評価結果への対応

<p>【2016年度大学評価結果総評】</p> <p>理工学研究科では2012年度認証評価における工学研究科に関する改善計画（報告）書で指摘のあった、博士後期課程におけるコースワークの充実に関しては、2015年度までに検討が進められ、2016年度に新科目が開設されるなど、改善が確認された。理系の研究科の改廃、設立経緯などの影響もあり教員組織面ではやや年齢が高いなどの課題を抱えているものの、教員の新規採用などにより改善されていくものと期待される。教育のグローバル化に関しては、十分な実績があり、またIISTが2016年度設置予定である等、他研究科のモデルともなりうる。一層の入学経路多様化などにより収容定員に対する充足率がなお高められていくことが合わせて期待される。</p>

<p>【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）</p> <p>博士後期課程におけるコースワークを新設し、2016年度より開講した。教員採用にあたり年齢構成に配慮したことで、専任教員の平均年齢が低下した。2016年度秋学期よりIISTが開設され、教育のグローバル化が着実に進行している。小金井キャリアセンターとの協同による大学院進学セミナーの開催、進学を薦めるリーフレットの配付など、収容定員に対する充足率の向上に努めている。</p>
--

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

<p>理工学研究科において課題とされてきた博士後期課程におけるコースワークの充実については、2016年度に開講された。教員の年齢構成についてはこれに配慮した新規採用により平均年齢が低下した。2016年度秋学期よりIIST（総合理工学インスティテュート）が開設され教育のグローバル化は進行している。小金井キャリアセンターとの協同による大学院進学セミナーの開催、進学を進めるリーフレットの配置などにより、収容定員に対する充足率の向上が図られており、概ね適切に対応していると判断できる。</p>
--

III 自己点検・評価

1 内部質保証

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。	
①質保証委員会は適切に活動していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>【2016年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2016年10月28日（金）：委員長選出、質保証委員会の果たすべき役割と活動、委員会体制 ・2017年3月2日（火）：2016年度点検・評価報告書素案の作成 ・2017年3月7日（火）：2016年度点検・評価報告書の作成（メール審議） ・2017年3月8日（水）：2016年度末報告書の最終確認 	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【この基準の大学評価】

理工学研究科における質保証委員会は、2016年度において1回のメール審議を含め合計4回開催された。その内容は初回に委員会の役割と体制を確認し、年度末に年度を振り返った点検・評価報告書を三度に渡り検討、確認して最終報告書をまとめるなど、質保証委員会の適正な活動がみられる。

2 教育課程・教育内容

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

【学位授与方針】

(修士課程)

先に掲げた教育目標に照らし、修士課程においては、高度な技術者・研究者として備えるべき、以下に示す学力と能力を修得した者に学位を授与する。

1. 高度な専門知識と技術を身に付けていること。
2. 研究内容を自身の言葉で論理的に説明できる能力を身に付けていること。
3. 真摯な態度で学術全体を俯瞰し、地球環境等に配慮できること。

(博士課程)

博士後期課程においては、上記の能力に加えて、高度な研究企画力を有し、自立して研究・開発を実践し、技術者・研究者として活動できる者に学位を授与する。

①研究科（専攻）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。

はい いいえ

2.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

【教育課程の編成・実施方針】

本研究科の学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)を実現するために、各専攻分野において、以下に示す教育課程と教育科目を配置する。

1. 機械工学専攻では、修士課程および博士後期課程において、各専門分野（材料・強度、流体・エネルギー、制御・総合）に関連する科目。
2. 電気電子工学専攻では、修士課程および博士後期課程において、各専門分野（エネルギー工学、制御工学、材料・物性工学、デバイス工学、通信工学、回路工学）に関連する科目。
3. 応用情報工学専攻では、修士課程および博士後期課程において、各専門分野（計算機工学、通信ネットワーク、情報処理工学、人間情報工学）に関連する科目。
4. システム理工学専攻（創生科学系）では、修士課程および博士後期課程において、各専門分野（知能科学、数理学、制御工学、センシング工学、物質科学、人間科学、人間工学）に関連する科目。
5. システム理工学専攻（経営システム系）では、修士課程および博士後期課程において、各専門分野（数理、金融工学、経済工学、生産管理工学、応用統計工学）に関連する科目。
6. 応用化学専攻では、修士課程において、各専門分野（物性化学、材料化学、化学工学、環境化学）に関連する科目。博士後期課程において、先端応用化学分野に関連する科目。
7. 生命機能学専攻では、修士課程において、各専門分野（ゲノム科学、蛋白質科学、細胞生物学、生命システム学、基盤植物医科、実践植物医科）に関連する科目。

①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。

はい いいえ

②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。

はい いいえ

【根拠資料】※冊子名称やホームページURL等。

・小金井大学院要項 I

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>(http://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2017_youkou_koganei_1.pdf)</p> <ul style="list-style-type: none"> 理工学研究科3つのポリシー <p>(http://www.hosei.ac.jp/gs/kenkyuka/riko/)</p>	
③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>(～400字程度まで) ※検証を行う組織(教授会や各種委員会等)や検証の時期等、検証プロセスを記入。 全専攻から選出された専攻主任・副主任によって構成される専攻主任会議において、随時検証している。検証結果を各専攻の教員に提案し、意見を聴取する。再度、専攻主任会議において全専攻の意見を反映した目標・方針を作成し、研究科教授会にて承認する。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 理工学研究科専攻主任会議議事録 理工学研究科教授会議事録 	
<p>2.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。</p>	
①修士課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>(～400字程度まで) ※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。 研究指導教員によるきめ細かな個別指導の下で行う最先端の研究活動(リサーチワーク)を補完し、それに必要な学力の修得を目的とする体系的カリキュラムの編成・実施(コースワーク)を行っている。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 小金井大学院要項 III <p>(http://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2017_youkou_koganei_3.pdf)</p>	
②博士後期課程において授業科目を単位化し、修了要件としていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 小金井大学院要項 III <p>(http://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2017_youkou_koganei_3.pdf)</p>	
③博士後期課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B
<p>(～400字程度まで) ※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。 博士後期課程において求められる高度な研究活動(リサーチワーク)に対し、課題の発掘・推進・解決を多角的にサポートするカリキュラム編成(コースワーク)を設定・実施している。</p> <p>【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 博士後期課程におけるコースワーク科目を新設し、2016年度より開講した。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 小金井大学院要項 III <p>(http://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2017_youkou_koganei_3.pdf)</p>	
④専門分野の高度化に対応した教育内容を提供していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>(～400字程度まで) ※学生に提供されている専門分野の高度化に対応した教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 教員は自らの研究活動・学会活動を通じて得られた知見を学生の研究指導・授業に反映することで、専門分野の高度化に対応した教育を実施している。また、最先端の研究分野で活躍している研究者を客員教員として招聘すること、各種セミナー・講演会を開催することで、最先端かつ高度な研究に学生が触れる機会を提供している。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 小金井大学院要項 III <p>(http://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2017_youkou_koganei_3.pdf)</p> <ul style="list-style-type: none"> グリーンテクノロジーセミナー開催案内 	
⑤大学院教育のグローバル化推進のための取り組みをしていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B
<p>(～400字程度まで) ※大学院教育のグローバル化推進のために行っている取り組みの概要を記入。 本学独自の大学院生海外発表補助制度および英語論文校閲制度については、実績として、理工学研究科が学内において</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

最も有効に活用してきた。大学院教育においては、世界で活躍できる一流研究者の育成が必須かつ急務であり、外国語コミュニケーション能力とグローバル視野を育成するために、海外留学、海外インターンシップ参加、国際会議発表を強く推奨している。日欧産業協力センター(経産省)主催のヴルカヌス国際インターンシップに積極参加しグローバル人材の育成に取り組んでいる。重点事業として、IIST (総合理工学インスティテュート)の新規開設に理工学研究科と情報科学研究科が協働して取り組んできた。設置準備委員会を中心として、管理運営、学生募集等について協議を重ね、2016年度秋学期より開設した。

【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
2016年秋学期よりIISTを開設した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ <http://iist.hosei.ac.jp/>

2.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。

- ・理工学研究科ガイダンスを開催し、履修・研究実施に必要な情報を周知している。
- ・指導教員による適切な履修および研究指導を実施している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・小金井大学院要項 I
(http://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2017_youkou_koganei_1.pdf)
- ・小金井大学院要項 III
(http://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2017_youkou_koganei_3.pdf)

②研究科(専攻)として研究指導計画を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。

はい いいえ

【研究指導計画の明示方法】 ※箇条書きで記入(ここでいう「研究指導計画」とは、個別教員の研究指導計画を指すのではなく、研究科としての研究指導を指す(学位取得までのロードマップの明示等))。

- ・小金井大学院要項に「修了までのスケジュール」、「履修モデル」を明記している。

【根拠資料】 ※研究指導計画が掲載された文書・冊子等の名称を記入。

- ・小金井大学院要項 I
(http://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2017_youkou_koganei_1.pdf)
- ・小金井大学院要項 III
(http://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2017_youkou_koganei_3.pdf)

③研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。

はい いいえ

(~400字程度まで) ※組織的な研究指導、学位論文指導の概要を記入。

「特論」・「特別研究」・「特別実験」等の講義・実験科目において研究指導・学位論文作成指導を行い、国際学会発表および国内外論文誌投稿を実施できる研究能力修得を可能にするきめ細かな研究指導を行っている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

④シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。

はい いいえ

【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入(取組例:執行部(〇〇委員会)による全シラバスチェック等)。

- ・専攻主任会議におけるシラバスチェック。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

⑤授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。

はい いいえ

【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入(取組例:後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等)。

- ・FDアンケートの意見等を参考に、各教員がフィードバック作業を行っている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

2.5 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。

S A B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シラバスに成績評価の方法・基準を明示し、公平性を確保している。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	
②学位論文審査基準を明らかにし、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>【学位論文審査基準の明示方法】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小金井大学院要項に学位論文審査基準を明示している。 	
<p>【根拠資料】 ※学位論文審査基準にあたる文書の名称および冊子等に掲載し公表している場合にはその名称を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理工学研究科修士課程学位審査内規 ・理工学研究科博士後期課程学位審査内規 ・小金井大学院要項 I <p>(http://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2017_youkou_koganei_1.pdf)</p>	
③学位授与状況（学位授与者数・学位授与率・学位取得までの年限等）を把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・専攻主任会議において、学位審査過程を運営管理し、学位授与状況を把握している。 ・研究科教授会において、専攻主任会議でまとめられた学位授与状況を確認・承認している。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理工学研究科専攻主任会議議事録 ・理工学研究科教授会議事録 	
④学位の水準を保つための取り組みを行っていますか。	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。</p> <p>指導教員は、学位論文研究進捗報告会・グループミーティング等を定期的に行い、学位水準を保っている。さらに、国内外の学会における研究発表に向けた指導を通じ、学位水準の向上に継続して取り組んでいる。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生補助金 ・学会発表奨励金 ・海外における研究活動補助費 	
⑤学位授与に係る責任体制及び手続を明らかにし、適切な学位の授与が行われていますか。	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>【修士】 (～400字程度まで) ※責任体制および手続等の概要を記入。</p> <p>各専攻において修士論文発表審査会を実施し、主査・副査は学位審査基準に従い、公正な合否判定を行っている。各専攻の判定結果は、専攻主任会議における審査後、理工学研究科教授会において審議・承認される。一連の手続きを経たのち、適切な学位の授与が行われている。</p>	
<p>【博士】 (～400字程度まで) ※責任体制および手続等の概要を記入。ただし、博士については、学位規則のとおりに行われている場合には概要の記入は不要とし、「学位規則のとおり」と記入してください。</p> <p>学位規則の通り</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理工学研究科専攻主任会議議事録 ・理工学研究科教授会議事録 ・理工学研究科修士課程学位審査内規 ・理工学研究科博士後期課程学位審査内規 ・小金井大学院要項 I <p>(http://www.hosei.ac.jp/documents/gs/jyugyo/koganei/rishu/2017_youkou_koganei_1.pdf)</p>	
⑥学生の就職・進学状況を研究科（専攻）単位で把握していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全専攻から選出される就職担当教員によって構成される就職担当者会議において、小金井キャリアセンターと連携し、学生の就職・進学状況を把握している。 ・研究指導教員を通じて学生の就職・進学状況が調査され、就職担当者会議にて各専攻の集計結果が報告される。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

・小金井就職担当学会議議事録	
2.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①学位授与方針に明示した学生の学習成果を把握・評価していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>(～400 字程度まで) ※取り組みの概要を記入 (取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等)。</p> <p>学生の学会発表・論文投稿・受賞等の研究実績件数を集計し、この情報を基に学習成果を測定している。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>	
2.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>(～400 字程度まで) ※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入</p> <p>各専攻において、教員が実施する試験・レポートによる成績評価に基づき、学習成果の検証を行っている。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>(～400 字程度まで) ※取り組みの概要を記入。</p> <p>各教員は、FD アンケート結果を学生からの重要な意見情報として活用している。または、質保証委員会において、教育の質向上の重要資料として活用している。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (必須項目)

※ (1) および (2) の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

・シラバスが研究科の教育目標に沿って作成されているかを検証する。

【この基準の大学評価】

①方針の設定に関すること (2.1～2.2)

<p>理工学研究科では、研究科として習得すべき学習成果、その達成のための要件を明示した学位授与方針 (ディプロマ・ポリシー) 並びに教育課程の編成・実施方針 (カリキュラム・ポリシー) が定められ、小金井大学院要項や WEB により周知・公表されている。また、これらは全専攻から選出された専攻主任・副主任によって構成される専攻主任会議において、随時検証されている。検証結果は各専攻の教員に提案され、意見が聴取され全専攻の意見を反映した目標・方針が作成され、研究科教授会にて承認されるといった手続きが取られており適切である。</p> <p>その一方で、「法政大学大学院入学案内 2017」には研究科全体のポリシーが掲載されていない。</p>

②教育課程・教育内容に関すること (2.2)

<p>理工学研究科修士課程においては、最先端の研究活動 (リサーチワーク) を補完し、それに必要な学力の修得を目的とする体系的カリキュラムの編成・実施 (コースワーク) が行われている。博士後期課程においても、求められる高度な研究活動 (リサーチワーク) に対し、多角的にサポートするカリキュラム編成 (コースワーク) が実施されている。また、研究者の客員教員としての招聘、各種セミナー・講演会の開催等で最先端かつ高度な研究に学生が触れる機会を提供してい</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

る。外国語コミュニケーション能力とグローバル視野を育成するために、海外留学、海外インターンシップ参加、国際会議発表が強く推奨されている。また重点事業として、IIST（総理工学工学インスティテュート）が2016年度秋学期に開設された。

③教育方法に関すること（2.4）

理工学研究科ガイダンスによる履修指導、各指導教員によるきめ細かな研究指導が行われている。シラバスは、専攻主任会議でチェックされている。

授業がシラバスに沿って行われているかの検証は、FDアンケートの意見等を参考に、各教員がフィードバック作業を行うことで対応している。

④学習成果・教育改善に関すること（2.5～2.7）

理工学研究科のシラバスには成績評価の方法・基準が明示され、公平性が確保されている。学位論文の審査基準については、小金井大学院要項に明示されている。専攻主任会議が学位審査課程を運営管理し、学位授与状況が把握されている。指導教員は、学位論文研究進捗報告会・グループミーティング等を定期的に行い、また国内外の学会における研究発表に向けた指導を通じ学位水準の維持・向上が継続的に取り組まれている。

学位授与に係る責任体制及び手続については、修士課程においては、各専攻において修士論文発表審査会で学位審査基準に従った可否判定を行ったのち、専攻主任会議での審査を経て教授会において審議・承認されており、適切である。学生の学習成果の把握・評価については、学生の学会発表・論文投稿・受賞等の研究実績件数を集計し、この情報を基に学習成果を測定している。

全専攻から選出される教員で構成される就職担当者会議が小金井キャリアセンターと連携し、学生の就職・進学状況を把握している。また、教育課程及びその内容、方法の適切性についての点検・評価については、各専攻において、教員が実施する試験・レポートによる成績評価に基づき、学習成果の検証を行っている。

授業アンケートなどによるその実行の検証、またこれらを体系的にチェックする質保証委員会など、教育方法に関する仕組みがつけられ、実行されている。

3 学生の受け入れ

【2017年5月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

3.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

【学生の受け入れ方針】

本研究科には、機械工学、電気電子工学、応用情報工学、システム理工学、応用化学および生命機能学の6専攻が設置されている。理工学のさまざまな分野での研究活動を通して社会の発展に貢献することを目的として、独創的・学際的・国際的かつ総合的視野に立った専門的な理工学の教育・研究を実践し、高度な専門技術者および研究者としての基礎的能力を備えた人材を養成している。

本研究科は、以下に示すような人を求める。

1. 高い志と粘り強さをもって、高度な専門技術者や研究者を目指す意欲にあふれる人。
2. 理工学研究に必要な基礎学力をもち、専門分野における知識と技術を学ぶために必要な実践、実行、応用および創造の能力を伸ばすことに意欲あふれる人。

各専攻では、多岐の分野にわたる専門を有する技術者・研究者を養成するために複数の入試方式を用意し、大学院教育を受ける基礎学力を備えているかを判定して学生を受け入れる。入試方式は5つあり、①一般入試、②学内推薦入試、③一般推薦入試、④社会人特別入試、⑤外国人学生特別入試である。

①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。

はい いいえ

3.2 学生の受け入れ方針に基づき学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。

①学生の受け入れ方針に基づき、学生募集および入学者選抜の制度や体制をどのように適切に整備していますか。また、入学者選抜をどのように公正に実施していますか。

S A B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(～200 字程度まで) ※取り組み概要を記入。

幅広い分野にわたる学生を受け入れるため、一般入試・学内推薦入試・一般推薦入試・社会人特別入試・外国人学生特別入試を実施している。一般入試において筆記試験科目を公表すること、学内推薦入試において推薦基準を明確化していること、すべての入試において口述試験の面接官を複数人で構成することで公正な選抜を実施している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・理工学研究科募集要項

3.3 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

①定員の超過・未充足に適切に対応していますか。

はい いいえ

(～200 字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

6年一貫教育を目標として掲げ、構成する学部(理工学部・生命科学部)と連携し、定員確保に努めている。一方、学内推薦入試において推薦基準を明確化するとともに、推薦人数が収容定員を超えないことと定め、適正管理を行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

定員充足率(2012～2016年度)

(各年度5月1日現在)

【修士・研究科合計】

種別\年度	2013	2014	2015	2016	4年平均
入学定員	295名	295名	295名	295	
入学者数	197名	180名	192名	149	
入学定員充足率	0.67	0.61	0.65	0.51	0.48
収容定員	295名	590名	590名	590	
在籍学生数	197名	376名	377名	341	
収容定員充足率	0.67	0.64	0.64	0.58	0.63

【博士・研究科合計】

種別\年度	2013	2014	2015	2016	4年平均
入学定員	22名	22名	22名	22	
入学者数	3名	1名	1名	4	
入学定員充足率	0.14	0.05	0.05	0.18	0.11
収容定員	22名	44名	66名	66	
在籍学生数	3名	4名	5名	6	
収容定員充足率	0.14	0.09	0.08	0.09	0.10

※定員充足率における大学基準協会提言指針

【対象】大学院研究科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合の提言指針】※改善勧告なし

提言	努力課題
修士・博士共通	2.00以上

【定員未充足の場合の提言指針】※改善勧告なし

提言	努力課題
修士	0.5未満
博士	0.33未満

3.4 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

①学生募集および入学者選抜の結果について検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。

S A B

(～400 字程度) ※検証体制および検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

学生募集および入学者選抜の結果について、専攻主任会議・研究科教授会において検証している。改善に向けた取り組みとして、2017年度入試より英語について、外部試験スコアを導入した。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
英語について、外部試験スコアを導入した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・理工学研究科募集要項

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、簡条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について簡条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

理工学研究科では、一般入試・学内推薦入試・一般推薦入試・社会人特別入試・外国人学生特別入試が実施され、幅広い分野にわたる学生の受け入れが図られている。一般入試の筆記試験科目の公表、学内推薦入試の推薦基準明確化、すべての入試において口述試験の面接員を複数おくこと等で公正な選抜が実施されている。定員確保に向け、6年一貫教育を目標として掲げ、構成する学部(理工学部・生命科学部)と連携している。学生の募集および入学者選抜の結果については、専攻主任会議・研究科教授会において検証されている。学生受入れに関する改善に向けた取り組みとして、2017年度入試より英語について、外部試験スコアを導入された。

4 教員・教員組織

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

【求める教員像および教員組織の編制方針】 (2011年度自己点検・評価報告書より)

工学研究科では、各専攻分野の高度の専門知識を有すると同時に、幅広い教養を持ち、地球規模でものごとを考える教員であることが期待される。専門分野の教育・研究を通して学生に自己探求心を持たせる教員であることが要求される。工学研究科は、学部・学科の上に立った研究科であるので、各専攻はそれぞれの学科の延長線上にあり、教員は当該分野における高い研究能力とともに教育にも優れた資質を合わせ持つことが要求される。しかしながら現在は工学部の学部再編成により、2007年度デザイン工学部の設置、さらに2008年度理工学部と生命科学部の設置により、各専攻科教員の所属は過渡期にある。理工学部および生命科学部が完成年度を迎えた今、2013年度に現在の工学研究科を改組により理工学研究科(仮称)として学科と専攻の対応関係を整備し、教員組織の充実を図るべく検討を進めている。

①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。

はい いいえ

【根拠資料】※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。

- ・理工学研究科内規(2013年4月1日より施行)

②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。

はい いいえ

【研究科執行部の構成、研究科内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】※簡条書きで記入。

- ・機械工学、電気電子工学、応用情報工学、システム理工学(創生科学系・経営システム系)、応用化学、生命機能学(生命機能学領域・植物医学領域)の6専攻および系・領域の教育・研究を総合的に議論する各専攻主任・副主任から構成される「専攻主任会議」を設置している。
- ・研究科長が研究科の責任を担うこととしている。
- ・各専攻は、各専門領域の教育研究を組織的に運営し、各専攻主任の責任下において各教員が当該専攻の教育研究の様々な役割を担うこととしている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

4.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

①研究科（専攻）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。

はい いいえ

(～400 字程度まで) ※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組織の概要を記入。

理工学研究科は、ディプロマポリシーおよびカリキュラムポリシーに基づき、十分な研究能力を有し、かつ研究科の理念・目的に沿った人材教育を実践可能な教員を適所に配置している。また、各専攻分野に配置された教員は、優れた教育・研究実績を備えている。今後、教育研究の質保証・質向上を実現するため、必要な専攻分野に増員人事等による教員組織の一層の充実を図る。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

2016 年度研究指導教員数一覧（専任）

(2016 年 5 月 1 日現在)

研究科・専攻 ・課程	研究指導 教員数	うち教授数	設置基準上必要教員数	
			研究指導 教員数	うち教授数
機械・修士	9	9	8	3
電気・修士	9	8	8	3
情報・修士	11	8	8	3
システム・修士	23	19	11	3
化学・修士	10	10	5	3
生命・修士	14	13	6	3
修士計	76	67	46	18
機械・博士	9	9	4	3
電気・博士	8	8	4	3
情報・博士	8	8	4	3
システム・博士	20	19	4	3
化学・博士	10	10	4	3
生命・博士	14	13	4	3
博士計	69	67	24	18
研究科計	145	134	70	36

研究指導教員 1 人あたりの学生数：修士 4.49 人、博士 0.09 人

②特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。

はい いいえ

【特記事項】(～200 字程度まで) ※ない場合は「特になし」と記入。

教員の新規採用に際し、6 年一貫教育体制を目標に掲げ、母体となる学部学科との調整により、年齢構成に配慮して採用を行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

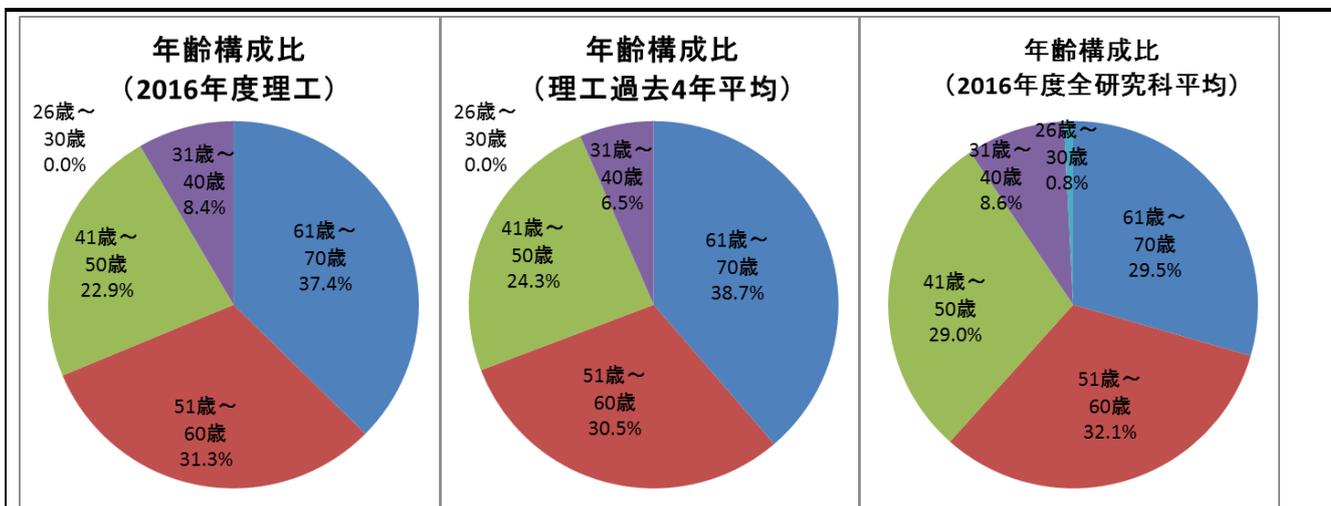
専任教員年齢構成一覧

(5 月 1 日現在)

年度\年齢	26～30 歳	31～40 歳	41～50 歳	51～60 歳	61～70 歳
2016	0 人	7 人	19 人	26 人	31 人
	0.0%	8.4%	22.9%	31.3%	37.3%

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。



4.3 教員の募集・採用・昇任等を適切に行っているか。

①大学院担当教員に関する各種規程は整備されていますか。

はい いいえ

【根拠資料】※大学院担当教員に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。

- ・理工学研究科教員資格内規

②規程の運用は適切に行われていますか。

はい いいえ

【教員の募集・任免・昇格に関する学部教授会との連携体制】※教員の募集・任免・昇格に関し、学部教授会とどのような連携が行われているか概要を箇条書きで記入。

- ・研究科教員資格内規に沿って専攻主任会議で精査したのち、研究科教授会において審議・承認する手続きを適切に実施している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

4.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①研究科（専攻）内のFD活動は適切に行われていますか。

S A B

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・理工学部・生命科学部の質保証委員会と連携し、FD活動を進めている。

【2016年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・FD推進センターで実施される授業アンケート内容を教員にフィードバックし、授業の質向上に活用している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

②研究活動を活性化するための方策を講じていますか。

S A B

【研究活動活性化の取り組み】※箇条書きで記入。

- ・教育研究補助金・学生研究補助金を継続して実施している。
- ・教員・学生の受賞報告と広報を学内外に対して継続して実施している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・理工学研究科教授会議事録

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【この基準の大学評価】

教員の採用・昇格、募集・任免の基準、また教員組織については、2013年度に定められ運用されている理工学研究科内規において明らかにされている。ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー達成を狙いとして、各専攻分野に優れた教育・研究実績を備えた教員が配置されている。また、各専攻主任・副主任から構成される「専攻主任会議」を設置し、研究科長が最終的な責任を担うことが明確となっている。教育研究の質保証・質向上実現のため、教員組織の一層の充実を図るための増員人事を企図されている。教員の年齢構成に配慮した採用が行われ、年齢構成は改善されつつある。FD活動、研究活動活性化への取り組み内容は標準的なものであるが、確実に実行されていると評価できる。

5 学生支援

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

①研究科（専攻）として外国人留学生への修学支援について適切に対応していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
(～400字程度まで) ※外国人留学生への修学支援に関する取り組みの概要を記入。 国際会議発表・論文作成などの各種研究活動を支援する制度を継続的に実施している。グローバル教育センターと協同して留学生の受け入れ体制を整備してきた。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・留学生への修学支援の強化を検討する。

【この基準の大学評価】

理工学研究科では、グローバル教育センターとの協働による留学生受け入れ体制整備を進めるとともに、IISTなど新たな入試経路で入学する学生についての支援も図られた。専攻主任会議において留学生の修学状況調査を進めることが予定されるなど、留学生の修学支援について多様な検討が進められているものと評価できる。

IV 2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準		教員・教員組織
現状の課題・今後の対応等		<ul style="list-style-type: none"> 大学院理工学研究科の教育研究力強化を実現するために、法政大学グローバル化事業と協働し、教育研究力を高める有効施策を実施する。 IIST（総合理工学インスティテュート）設置に向けて、設置準備委員会を中心とする運営により今年度新規開設を果たす。 研究力強化を推進するために、教育研究補助制度の回復を求める。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> 若手教員の教育研究活動活性化と、学生の教育研究環境充実の施策として、適正・的確な研究指導資格審査を従来より継続して実施した。 IIST 設置準備委員会および IIST 連絡協議会と連携し、2016年9月 IIST 設置を果たし、第1回入学式(2016年9月12日)を実施した。
	質保証委員会に	<ul style="list-style-type: none"> 専任教員の平均年齢の高齢化の是正が勧告されているが、各専攻において若手教員の採用

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	よる点検・評価	<p>を決定するなど、改善の方向に向かっていることが認められる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員の新規採用および昇格においては、研究業績および教育業績を元に厳格に研究指導資格審査を行っていることが認められる。 ・IIST に関しては、従来の計画通り設置を果たし、IIST 専任教員 1 名の採用を行うなど、IIST の教育体制の充実が図られており、十分評価できる。
評価基準		教育課程・教育内容
現状の課題・今後の対応等		<ul style="list-style-type: none"> ・大学院強化に必須な、国際会議発表および論文発表の研究助成制度の財政基盤弱体化が、将来の大学院弱体化をもたらす危険性を危惧している。 ・研究助成制度の財政基盤回復・強化の施策提案を今後の課題として考える。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度新たに設置された博士後期課程のコースワークを当該専攻(機械工学専攻, 応用化学専攻, システム理工学専攻創生科学)において適切に実施した。
	質保証委員会による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・博士後期課程のコースワークに関しては当初の計画通り科目が設置され、授業が行われたことは評価できる。一方でその教育効果についての検証が望まれる。
評価基準		教育方法
現状の課題・今後の対応等		<ul style="list-style-type: none"> ・国際会議発表、論文発表、受賞などの研究力強化に必要な研究科の統計データを作成する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・研究活動の受賞・表彰報告を速やかに HP 公開できるように事務手続きを簡素化し、動機付け教育と研究広報の向上に資することとした。 ・年度末までに、国際会議発表、論文発表、受賞などの対外発表の統計データを作成する。
	質保証委員会による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・研究活動に関する受賞・表彰報告のHPへの掲載の迅速化は、十分に認められる。 ・一方、研究業績の対外発表の統計データについては、現在、研究科長が使用しているのみであり、統計データの教員へのフィードバックがなされていない。同データの有効活用法を検討すべきである。
評価基準		成果
現状の課題・今後の対応等		<ul style="list-style-type: none"> ・大学院進学率の適正値を確保し、大学院強化の礎を築く施策を計画・実施する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・教員・学生が一体となって、各種の研究活動支援制度を活用して国際会議論文発表をはじめとするグローバルな研究活動を実施し、理工学研究科の研究活動活性化に貢献した。
	質保証委員会による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・学生研究の集計結果を数値化し、各種研究活動支援制度の教育効果をアピールする必要があると考えられる。
評価基準		学生の受け入れ
現状の課題・今後の対応等		<ul style="list-style-type: none"> ・学生の進路設計指導を充実させ、学生の満足度を向上し、かつ大学院進学率の適正値確保を目指す。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・2017 年度入試の英語試験において、英語外部スコアの導入を開始した。外部スコア導入の効果を今年度以降観察する。 ・理工学研究科の入学試験の「問題作成・実施要領」の冊子案を作成し、大学院入学試験の適正実施と理工学研究科の教育・研究の質保証確保に資することとした。 ・大学院進学の魅力・メリットを、キャリアセンターと連携して広報し、定員充足率の改善に資した。
	質保証委員会による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・入試の英語科目における外部スコア導入の効果を観察するとあるが、具体的にどのようにして効果を判定するか、方法が不明瞭である。 ・入学試験の「問題作成・実施要領」の冊子案を作成することによって大学院入試が適正実施され、教育・研究の質保証確保に資するとあるが、冊子案作成と入試の適正実施との関連性が不明瞭である。 ・昨年度に引き続き、継続的にキャリアセンターと連携して大学院進学の特長を学生に伝え、定員充足率の改善につなげる努力をしていることは評価に値する。
評価基準		学生支援
現状の課題・今後の対応等		<ul style="list-style-type: none"> ・各種支援制度について、IIST 等、新たな入試経路で入学する 9 月入学生についても 4 月入学生と同様の支援が行えるよう、支援制度の改革を果たす。 ・グローバル教育センターと連携して、留学生を支援する体制を整備する。 ・専攻主任会議において留学生の修学状況を調査検討し、教員間、大学院係間の情報共有を

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

		実施し、適宜適切に留学生に対する指導支援策の検討・実施を進める。
年度末 報告	教授会執行部による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・2016年9月期に入学した IIST 入学生に4月期入学生と同等にチューター学生による指導を施し、入学時以降の学習活動の支援を実施した。 ・IIST と連携し、法政・清華大学合同の先進理工学研究コロキウム(2017年1月12日)や小金井キャンパス留学生交流懇親会(2016年11月11日)を通して、さまざまな勉学・研究・学生生活全般についての情報交換を活性化した。
	質保証委員会による点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・I I S T 入学生に対するチューター制度の実施をするなど学習支援は適切に行われていると評価できる。 ・IIST と連携した国際交流会は、IIST の知名度向上に資するとともに新たな留学生確保にとって大変重要な行事であり、適切に実施されたことは評価に値する。

【2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

継続的に取り組まれてきた法政大学グローバル化事業と協働する IIST (総合理工学インスティテュート) が 2016 年秋学期に設置・開設されたことは高く評価できる。継続課題とされてきた博士後期課程のコースワークが、機械工学専攻、応用化学専攻、システム理工学専攻創生科学系において実施されたことも評価できる。国際会議発表、論文発表、受賞などの研究力強化に必要な統計データ作成の課題に対し、研究活動の受賞・表彰報告を速やかに HP 公開できるように事務手続きが簡素化されたことは、研究活動広報を振興する面から高く評価できる。一方、研究業績の対外発表の統計データについては、現在、研究科長が使用しているのみであり、統計データの教員へのフィードバックがなされていない。大学院進学の魅力・メリットについてキャリアセンターと連携して広報し、定員充足率の改善に向けた取組がみられる。IIST 入学生に対するチューター制度が実施されるなど学習支援は適切に行われていると評価できる。以上のように 2016 年度の課題の多くが具体的な施策により対応され、IIST の実現などを含めて総じて適切な対応がなされているものと評価できる。

【大学評価総評】

理工学研究科における内部質保証については質保証委員会が定期的実施され年度を振り返った点検・評価報告書が慎重に審議されまとめられているなど、適正な活動がみられる。理工学研究科の3つのポリシーは WEB や小金井大学院要項により周知・公表されている。大学院教育で課題とされるリサーチワーク、コースワークは修士課程、博士後期課程ともに導入され課題解決がなされた。大学のグローバル化事業と連携した IIST が 2016 年秋学期に設置・開設されたことは高く評価できる。シラバスは WEB 上に公開され、その内容は専攻主任会議がチェックし、授業評価アンケートなどを通じ学生の意見が担当教員に届き、これに基づき見直しなどが行われている。幅広い分野の人材を受け入れるため多様な入試が実施され、また6年一環教育が目標と掲げられ学部と連携した進学促進に係る取組がみられる。教員の採用・昇格、募集・任免には基準が設けられ、偏りのあった年齢構成は改善に向かっている。専攻主任会議において留学生の修学状況調査を進めることが予定されるなど、留学生の修学支援について多様な検討が進められている。以上のように理工学研究科では、教員・教員組織、教育規程・教育内容、教育方法、学生を受入れ、学生支援などに係る自己点検は機能し、多くの側面での改善がなされてきている。今後、その成果についてより具体的な指標などとして確認されていくことが期待される。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。